
CAR LOVE LETTER 『Coffee and Apple pie』

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAR LOVE LETTER 「Coffee and Apple pie」

【Nコード】

N9490H

【作者名】

YAS

【あらすじ】

主人公に母の訃報が届く。彼女は実家へと急ぐが、しばらく敷居をまたいでいない。原因は父との大喧嘩であった。(テーマ車種：三菱エクリプススパイダー (D53A))

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持つたことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: MITSUBISHI Eclipse Spider (D53A)>

兄から、お母さんの訃報が届いた。

私はアナウンサーを生業にしており、毎日の生放送番組も担当させてもらっているため、お葬式には行けないと思っていたのだが、上司の計らいで、新人アナウンサーが私の代打を務める事になり、私は少しの間休暇をもらえる事になった。

実家に帰るのは、実に七年ぶりだ。

大学を出てテレビ局に勤めてからは、一度も敷居を跨いでいない。その理由は、お父さんとの大喧嘩。

お父さんは古い考えの人で、私がアナウンサーになることに大反対だった。

小さい頃からの夢だったアナウンサー。小中高と放送部に所属し、大学でも報道関係を学び、テレビ局への内定も勝ち取り、その夢が現実となるその直前、お父さんと正面衝突。

もしもアナウンサーになるのであれば勘当するとまで言われたが、私も長年の夢を諦められない。

結局お父さんとは喧嘩別れで、顔を見たのもそれっきりだった。

お母さんや兄とは連絡を取り合っていて、お母さんが女性特有の病気を患っていたのは知っていたのだが、まさかこんな事になるほど病状が進行していたとは知らされていなかった。

そんな話は信じられなくて、全然実感が湧かなかったけれど、兄と

の電話を切ってから、少しずつ背中に重たく現実がのしかかってくる。お母さんが居なくなる。私の心の支えが崩れていくような気がする。私はめまいの様な感覚を振り払い、局の地下駐車場に駆け降りた。

いつも収録が終わるとフルオープンにして、陽光と風を楽しむのが習慣で、バラエティ番組でもとりあげられた事もある私の自慢のエクリプスだが、今日はさすがに屋根は閉じたまま、私は取るものも取らず、実家までの道を急いだ。

久しぶりに訪れる故郷の街並み。

知っているお店の隣に知らないお店が出来ていたり、山が削られて住宅地になっていたり、私の知らない間にこの街も随分変わっているようだった。

お父さんにこの車を見られたら、また何か言うに違いない。私は兄の自宅にエクリプスを置かせてもらい、兄夫婦の車に同乗させてもらうことにした。

故郷の街並みにも驚いたが、一番の驚きはお父さんの変貌ぶりだった。

髪は真っ白になり、顔の皺も増え、七年とはこれほどまでに人を変えてしまうのだと思った。

でも、「元気そうだな。」と口を開いたお父さんのその優しくも鋭い眼光は、七年前から少しも変わっていないようだった。

お母さんは、和室に寝かされていた。本当に安らかな寝顔。

私はそのお母さんの姿を見るやいなや、すがり付いて泣いた。

「今にも飛び起きて、晩ご飯の支度をしてくれそうだな。」と、あ

の優しくも鋭いお父さんの眼光は、寂しそうにうつむき、輝きを曇らせた。

弔問に訪れる知人の対応や、お葬式の準備などで何かと忙しく、ゆつくり話をする時間がなかなか取れないまま、お父さんは翌日に備えて床に着いてしまった。

私と兄は、今晩は線香の火を絶やさぬ様、寝ずの番をする。

「最近よくテレビ出てるよな。兄貴としてこんな妹を持って、鼻が高いよ。」

テレビの話から、お母さんの病気の話、兄夫婦に子供が出来た話など、家族の近況を聞く。

そして、思いも掛けないお父さんの話も聞いた。

私がテレビに初めて出演した時から今まで全ての番組を録画しているそうだ。

機械は全く触らない人だったのに、インターネットで私の出演番組を調べたり、兄にビデオの使い方教わり、最近ではそれをDVDに編集までしているそうだ。

「あんなに反対してたけど、知り合いにはお前のご物凄く自慢してるんだぜ。」

まさか、あのお父さんが私のことを応援してくれていたなんて。

私は兄やお母さんに、お父さんの悪口を言っていたことを、強く強く後悔した。

お葬式でのお父さんは、溢れそうになる涙をこらえ、お母さんを見送った。

人前で涙を見せるなど私たちに言ってきたお父さん。式の途中で誰も居ない控室に下がり、また式に戻る姿があった。きつとそこで、こらえきれなくなった感情を吐き出していたのだろう。

お母さんが小さな骨壺に納められ、四十九日の繰越し法要を済ませ、激動の3日間がやっと終息する。十分な睡眠が取れなかったことと、泣き疲れもあり、お葬式の後には家族全員バタンキューだった。

しかし、あつと言つ間の3日間でもあつた。

今まで何十年も共に過ごして来た人とお別れするには、この3日間の儀式だけではあまりにも短か過ぎる。

私ですらそう感じるのだから、もっと長い時間を共に過ごしたお父さんには、その感覚は更に強いものだろうと思う。

翌日、私は少々朝寝坊した。久しぶりの朝寝坊。いつもは朝の番組の為に、絶対にあつてはならない行為だ。

リビングに降りると、お父さんはもう起きていて、テレビを観ながらコーヒーを飲んでいた。

「おはよう。」

私が声を掛けると、お父さんは少し枯れた声で、「おお。」と応えた。

テレビには私のつとめる番組が流れている。何だかとてもフクザツな気分。

「この番組の司会は、やっぱりお前じゃなきゃつとまらんな。」
お父さんはコーヒーをすすりながら、ポツリとそうつぶやいた。

やっとお父さんとゆっくり話をする時間が出来たのだが、何から話したらいいのか。
無言のまま暫く時間が経ってからお父さんから会話の口火を切ってきた。

「お前まだ、あの番組でやってたオープンカー、乗ってるのか？」

まさか車の話題が出るとは。

でもテレビで私のエクリップスが出たのは一回きりだし、しかも尺もほんの少しだったのに。

それをチェックしてくれていたのだから、兄の言っていた事は本当だったのだ。

お父さんは、オープンカーで出かけようと言い、近所の行楽地の住所を示した。

私はお父さんを助手席に乗せてエクリップスを走らせた。とっても不思議な気分。

「なあ、屋根はどうやって開けるんだ。」とお父さんは聞いてきた。私は信号待ちのタイミングで、ソフトトップを開け放った。

柔らかな陽光と風が、私達を包む。

「何とも気持ちがいいな。」と、またお父さんがポツリとつぶやく。

お父さんに案内された所は、ログハウス風の小さなカフェだった。コーヒーと、ケーキの焼ける甘く芳ばしい香りのするお店だ。

私達兄妹が独立してから、お父さんとお母さんは二人でいるんな所に足を運んだそうだ。そこで見つけた、このカフェ。

飛び入りで入った店だったけれど、コーヒーとアップルパイが本当

に美味しく、以来ここにはちよくちよく訪れる様になったと言う。
私とお父さんの前に、そのコーヒーとアップルパイが運ばれてくる。
甘い物が大好きな私は、自然と笑みがこぼれる。

お父さんはアップルパイを頬張る私を、優しい表情で見つめ、こう
言った。

「お前、綺麗になったな。若い頃の母さんに、仕草とか似てきたよ。」

そこから、お父さんはゆっくりと話を始める。

私と大喧嘩した後、お父さんは本当に後悔したそう。私が一番やり
たい事をやるべきだ、本心ではそう思っていたのだけれど、得
体の知れないテレビ業界に、私を送り出したのだからと言う。
その後は、兄から話を聞いた通り。

実は私の出る番組に投書をくれたり、公開放送に来てくれた事もあ
ったそう。

今まで私の中で空っぽだった「お父さん」という入れ物が満たされ
て行く感じがする。

同時に、昨日まで一生分流したと思っていた涙が溢れてくる。

「ほら、コーヒーとパイが冷めてしまっぞ。」

そう言うお父さんの瞳にも、涙がにじんでいるように見えた。

「お母さん」という心の支えを無くしてしまったけれども、今度は
私には「お父さん」と言う心の支えが出来上がった。本当に強い、
心の支えが。

私の帰り際、お父さんは、「まさかお前、芸人やスポーツ選手と結婚するんじゃないかなろうな？」と聞いてきた。最近バラエティの仕事も増えてきているからかしら？

「安心して。私が今お付き合っているのは、大学の時の同期だから。」

そう言うとお父さんは、ちょっとフクザツな表情をみせた。

そして、「今度は二人で遊びに来い。」と。

翌日から私は、また番組に戻った。

テレビではどんなに辛い事があっても、それを表に出す事は出来ない。

お父さんのコーヒートアップルパイがなければ、私は立ち直れなかったかも知れない。

ありがとう。お父さん。

今日も収録後に、エクリプスをフルオープンにして、柔らかな陽光と風を感じて走ろうと思う。

お父さんのアップルパイの香りを、思い出しながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490h/>

CAR LOVE LETTER 「Coffee and Apple pie」

2010年11月14日09時27分発行